

Title	オランダ領東インドにおける日本人売薬商についての一考察： 1900年代から1910年代を中心に
Sub Title	The Japanese medicine traders in Netherlands East Indies 1900s–1910s
Author	Meta Sekar Puji, Astuti
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.72 (2011.) ,p.35- 54
JaLC DOI	
Abstract	<p>This paper analyzes the activities of the Japanese trading community in the Netherlands East Indies (NEI) prior to 1942. The specific focus is upon Japanese medicine traders in the NEI during the 1900s–1920s.</p> <p>Japanese trading communities were present in the NEI from the beginning of the twentieth century. From the early 1900s until the late 1930s, Japanese commercial communities increased dramatically and in the beginning of 1940s they were already spread throughout the archipelago. The first wave of Japanese residents was dominated by Japanese women who served as prostitutes in the 1890s. The ratio of women to men decreased as male medicine traders arrived. Japanese commercial communities vanished before outbreak of World War II, and the context changed dramatically with the Japanese military occupation of the NEI from 1942. During the 1900s–1910s as a result of exaggeration in contemporary Japanese press regarding the extent of Japanese economic expansion into Southeast Asia, the Netherlands East Indies government became suspicious and ordered local governments to monitor Japanese male medicine trader activities. The aims of this paper are: 1) to analyze the historical background and trading activities of the Japanese medicine traders in the NEI; 2) to analyze the relations of Japanese medicine traders with local people; and 3) to analyze the monitoring and controlling initiatives puts in place by the NEI government with respect to Japanese traders. To complete this analysis, this paper also provides the results of secret missions from 28 NEI local governments initiated in response to secret instructions to observe Japanese medicine traders issued by the first secretary of the NEI government, E. Moresco.</p>
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000072-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オランダ領東インドにおける日本人売薬商についての一考察

— 1900年代から1910年代を中心に —

The Japanese Medicine Traders in Netherlands East Indies 1900s–1910s

メタ・スカル・プジ・アストウティ*

Meta Sekar Puji Astuti

This paper analyzes the activities of the Japanese trading community in the Netherlands East Indies (NEI) prior to 1942. The specific focus is upon Japanese medicine traders in the NEI during the 1900s–1920s.

Japanese trading communities were present in the NEI from the beginning of the twentieth century. From the early 1900s until the late 1930s, Japanese commercial communities increased dramatically and in the beginning of 1940s they were already spread throughout the archipelago. The first wave of Japanese residents was dominated by Japanese women who served as prostitutes in the 1890s. The ratio of women to men decreased as male medicine traders arrived. Japanese commercial communities vanished before outbreak of World War II, and the context changed dramatically with the Japanese military occupation of the NEI from 1942. During the 1900s–1910s as a result of exaggeration in contemporary Japanese press regarding the extent of Japanese economic expansion into Southeast Asia, the Netherlands East Indies government became suspicious and ordered local governments to monitor Japanese male medicine trader activities.

The aims of this paper are: 1) to analyze the historical background and trading activities of the Japanese medicine traders in the NEI; 2) to analyze the relations of Japanese medicine traders with local people; and 3) to analyze the monitoring and controlling initiatives put in place by the NEI government with respect to Japanese traders. To complete this analysis, this paper also provides the results of secret missions from 28 NEI local governments initiated in response to secret instructions to observe Japanese medicine traders issued by the first secretary of the NEI government, E. Moresco.

はじめに

19世紀の後半から数多くの日本人移民が、当時はオランダ領東インドと呼ばれたインドネシアの各地に渡り、この地に住み着いた。そして、その数は、「大東亜戦争」¹⁾前までには約6500名にものぼった。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程

日本人のオランダ領東インド進出は、男性に先駆けて明治初頭に、オランダ領東インド各地の娼館に身売りされた「からゆきさん」たちの渡航という哀しい歴史から始まった。次いで、明治中頃から、ほとんど資本をもたない男性の日本人移民たちが生活の糧を求めて渡航した。ハワイや南米に行った国策移民と違って彼らは自費で渡航し、その多くは行商から身を立て、後に小さな雑貨店をオランダ領東インドの各地に開設した商業移民である。

その後20世紀に入ってようやく大企業のオランダ領東インド進出が始まり、この地に骨を埋める覚悟でやってきた移民たちとは異なる、駐在員というカテゴリーの人々がやってくるようになった。1909年に支店を開設した三井物産がその最初だと言われている。1910年代になると、日本政府はバタビアを初め、メダン、スラバヤ、マカッサルなどに総領事館を開設した。また日本人会や日本人学校が設立され、邦字新聞が刊行されるなど、日本人社会の様相も急激に変化していった。そしてこれ以降「大東亜戦争」前夜まで、当地での日本人の活動は、移民として定着した人たちと駐在員としてやってきた人達の双方を重要な柱とし、その規模は年々拡大していった。

しかしながら、植民地時代から続いていた日本人の到来と彼らの生活は、「大東亜戦争」開戦後、日本軍がこの地を軍事侵略し占領したことによって中断されてしまった。居住していた日本人は敵国民としてオランダ官憲に逮捕され、資産を接収された上、オーストラリアに抑留されてしまったのである。

本稿は、そのようなオランダ領東インド時代の日本人社会の歴史の中で、1900年代ならびに1910年代、つまり初期のころの商業移民の活動に焦点をあて、彼らの実態を分析し、日本、インドネシア、オランダの三者の関係における歴史的な意味を探ろうとするものである。

戦前期の日本人の商業活動についての専門家であるオランダの研究者ピーター・ポスト (Peter Post) はその著作の中で、日本人の商売の形態は、行商と固定商店の2つのタイプがあったことが特徴的であると指摘している [Post 1991: 167]。本稿はそのうち行商人に注目する。行商人はマッチ、櫛、糸、陶器、薬など日常の生活用品を大きな行李に入れ、それを現地で雇った現地住民たちに天秤棒で担がせ、街から街へ、村から村へと売り歩いた。筆者は、彼らが売り歩いた商品の中で、もっとも重要な意味を持ったものとして、仁丹や目薬などの庶民向けの薬に注目した。

1900年代から1910年代の日本人売薬商に焦点を当てるのは、この時代に取り扱われていた多数の日本商品の中で、仁丹などの薬が占めていた割合が非常に多いということに加え、彼らがオランダ領東インドにおける日本人コミュニティの基礎を築き、インドネシア「原住民」社会との密接な接点を持つ上で重要な意味を持ったと思われるからである [Shimizu 1991: 41]。

それまでの「からゆきさん」や、博打うちや女術^{せげん}などとは違って、この人たちは、いわゆるまっとうな職業に従事する最初の日本人移民グループであって、当地の日本人コミュニティを形成する役割を果たした。すなわちこの時期の売薬商の商業活動は、これ以後の時期、「トコ・ジュパン (Toko Jepang)」（文字どおりの意味は「日本の店」と呼ばれてインドネシアの原住民から愛着をもって受け入れられるようになった日本人商人たちの小規模な商業活動や、日本人居留民のライフスタイルの原型になったのではないかと考えられるのである。本稿で論じる小川利八郎、堤林数衛、大友信太郎など、日本人社会の重要人物とみなされる商人の多くは、この1900年代から1910年代に渡航している。

1. 先行研究

オランダ領東インドを含めた日本人の南方各地への進出の歴史に関しては、すでに多くの研究があ

る。とりわけ矢野暢の古典的な研究『南進の系譜』[矢野2009(1975)]以来、幅広く論じられるようになった。この研究は、いわゆる国策としての南進論にまでつながる大きなテーマを扱っている。また、広大なアジアの通商ネットワークに焦点を当てた杉山伸也の研究もある。杉山は、大戦間期の日本の繊維製品の取引をヨーロッパとの競争という観点から論じている[Sugiyama 1994. 杉山1985]。

南方全域での日本人社会の実態や、交易ネットワークを論じた矢野や杉山の研究は、その後各国別のより詳細な研究へと広がった。インドネシアのケースに関しては後藤乾一が、すでに1970年代から日本インドネシア関係に関する多くの先駆的な研究を行い、その中で戦前の日本人社会についても触れている[後藤 1986]。この中では、後藤は政治的な観点、とりわけインドネシアの民族運動との関連から、日本の国策としての南進論や、アジア主義的な人脈との関係でオランダ領東インドにおける日本人の活動を論じている。後藤の研究の特徴の一つは、個々の日本人居留民に焦点をあて、彼らが「大東亜戦争」開戦前夜においてインドネシア民族運動と様々なかかわりをもったことに注目し、その手記、日記などを詳細に分析する手法であり、これにより、当時の日本人とインドネシア人の間に築かれていたネットワークがいきいきと紹介されている。

さらに『近代日本と東南アジア』[後藤 2010]においては、沖縄出身の漁民の活動や、日本の対南方戦略の拠点であった台湾との関係にまで関心を広げ、多くの刺激的な分析の視点を提示した。ただし後藤の諸研究では、本稿でとりあげる初期の頃の行商人、とりわけ売薬商に関しては特に論じられていない。

日本人による研究の集大成は、白石隆・白石さやの共同編集による[Shiraishi Takeshi, Shiraishi Saya 1993]である。同書では、「南洋」と言う概念を定義し、オランダ領東インドのみならず、マラヤ、シンガポール、フィリピン等も含めた東南アジア各地の事例が、複数の日本人研究者によって比較の視点を交えて論じられている。この本の中で、オランダ領東インドを担当した村山義忠は、日本の外務省の資料に依拠して、日本人移民のオランダ領東インド社会への浸透の特徴について論じ、明治期から1930年代末に到るまでの人口の変遷を丹念に追っている[Murayama 1993: 89-111]。

オランダにおいても1980年代後半以降、主としてオランダの公文書を活用して、戦前の日本人居留民の経済活動を分析する[Dick 1989]などの研究が著された。ポストは、日本のオランダ領東インドへの浸透に焦点をあて、日本人の商業の歴史と特徴、ならびにインドネシアの「原住民」エリートに対して彼らが果たした役割を論じている[Post 1991; 1996: 88-110]。同書は、「からゆきさん」の時代から売薬商、「トコ・ジュパン」、大企業の進出に到る変遷を紹介し、1950年代のインドネシア人のビジネスの発展に与えた影響までを論じると共に、日本人商人と華僑商人との比較を行なっている。一般的に、西洋、特にオランダの研究者たちは、戦前の日本人の活動について、ある種の政治的背景を持っているとして懐疑的に論じる傾向にある。しかしながら、欧米人や中国人とは異なる文化的背景をもっていた点を強調し、また日本人の生活様式、新しいビジネス・スタイル、現地住民との間に築きあげたネットワークなどに注目するポストの論調は、こうしたオランダ人研究者の主流とは、異なる視点を提示している。

一方、当事国であるインドネシアにおいては、まだこの種の研究は発展していない。日本語文献を活用した日本研究は、言語学や文学に集中しており、歴史研究の分野では、欧米の言語のみに依拠し、「大東亜戦争」期の日本軍による占領時代を論じるものがほとんどである。インドネシア人研究者の間では、オランダ領東インドにおける日本人の存在は、ファシズムや日本軍政(1942年から1945年)の

一部であるという一般的な認識のゆえに、戦前の日本人社会の意義については余り関心が払われてこなかった。つまり多くのインドネシア人によって、その存在は、日本軍政の歴史の序章としてしか看做されてこなかったのである。

それは欧米の文献、とりわけ H. J. ファン・モーク (H. J. Van Mook) 元副総督による『オランダ領東インドにおける10年に及ぶ日本人の潜伏 (Tien Jaar Japansche Gewrote in Nederlandsch-Indie)』[Mook 1942] などによる影響を受けてきたことによる³⁾。これはオランダの正式の見解を反映したもののだが、インドネシア人の多くは、世代により多少の違いはあるにしても、長い間この種のステレオタイプ的な見解を、ほぼそのまま受け入れてきたのであった。

戦前の日本人社会についてのインドネシア人による研究は、筆者自身が1996年に、主として日本語文献を活用し論じた、ガジャマダ大学の卒業論文が最初のものであろう。この研究は後に修正が加えられ、インドネシア語の単行本として刊行された [Astuti 2008]。その後、ナウイヤント (Nawiyanto) は、日中の商業的競合関係を1930年代の世界恐慌期と1998年のアジア経済危機を比較研究した [Nawiyanto 2009]。

ところで、アメリカの歴史学者はシャーマン・コ克蘭 (Sherman Cochran) は中国の製薬が20世紀はじめにアジア各地へ浸透していった歴史についての研究を刊行した [Cochran 2006]。コ克蘭は欧米列強の商品の世界的伝播とは異なる、中国という経済的に劣勢と見られてきた地域の商品が世界に進出していった過程に注目している。

2. 論文の構成

本稿は以上のような先行研究の積み重ねの上に立ち、前述のような問題関心のもとに進められている研究の一部であるが、その構成は以下のような3章から成る。

第1章は、研究の背景として、「からゆきさん」以来のオランダ領東インドへの日本人の進出の歴史を概観する。

次いで第2章において、その日本人の発展の歴史の中で、1910年代に焦点をあて、特に売薬商の重要性に着目し分析する。その中で、「からゆきさん」の存在が、日本の民間薬の進出をもたらし上で重要な意味を持ったことを指摘し、彼らの活動の詳細を分析する。また、薬品のオランダ領東インドへの輸出の経緯とその影響をも分析する。これは日本の薬が、当時劣悪な医療環境下にあった当時の現地住民たちに与えた影響が大きかったと考えられるからである。薬の販売に際して当時の現地の新聞・雑誌に掲載された広告や看板の文言を通じて、オランダ領東インドで最も多く販売されていた2つの日本の薬、すなわち仁丹と目薬 (点眼薬) について、その現地社会への浸透度を推測する。

次いで第3章では、彼らの活動に対するオランダ政庁の反応を分析し、オランダ当局は売薬商たちが純粋に商業活動をしていただけでなく、スパイ活動に関係しているのではないかと言う危惧を抱いていたとことを指摘する。1913年9月10日に対日・対中国商業問題顧問 (Adviseur voor Japansche en Chineessche Zaken) のヴェットウム (Wettum) が、オランダ領東インド総督 A. W. F. イーデンブルフ (Idenburg) に、送った書簡、それに対して政庁官房長官 (1sten Gouvernements secretaris) のモレスコ (Moresco) が、各地の地方政府に送った回状、またそれに応じて28の地方政府から政庁宛てに送られた報告書を分析すると、オランダ植民地当局は日本人に対する危惧を抱き、日本人商人たちの南方への進出に関する風評や実態に関心を強め、真剣に監視するようになっていたことがわかる。

1920年代中頃、オランダ領東インドの貿易額の中で日本からの輸入がオランダからのそれを越えて第1位になった。さらに日本が中国大陸への侵略を開始した1930年代以降、オランダ政府が日本に対する警戒心を非常に強めるようになったということは、ほぼ通説になっている。しかし、1913年から1914年は、日本からオランダ領東インドへの貿易量が急増する前の時期であった上、少なくとも政治的には日本はオランダにとって友好国であった。故に、このように早い段階で既に、オランダが日本人に対し、警戒心を強めていたということは注目に値する。本稿ではオランダの危惧が取り越し苦労だったのか、それとも日本人商人たちが何らかの国策的な活動を担っていたのかを検証するとともに、後年一般的になった「日本人商人スパイ説」が既にこの時期から芽生えていたことを立証する。

3. 依拠した資料

本研究が依拠する資料は、当時インドネシアで刊行されていた新聞・雑誌、日本人の移民達を書き記した手記、そしてオランダ植民地当局の公文書、ジャワ銀行の資料等である。

新聞は、オランダ領東インドで当時刊行されていた日本語新聞の「東印度日報」と「爪哇日報」を用いた。日本人移民たち自身が残した資料としては、56人の関係者の手記を集めた〔武田（編）1978〕や、写真集〔ジャガタラ友の会（編）1987〕を使用した。1968年に刊行され、のちに1978年に改訂された『ジャガタラ閑話—蘭印時代邦人の足跡—』も使用した。

オランダ政庁の資料は、ハーグのオランダ国立文書館（Algemeen Rijksarchief）ならびにジャカルタのインドネシア国立文書館（Arsip Nasional Republik Indonesia）に多く所蔵されている。本研究で主として利用したのは、各州の理事官や県の監督官などオランダ人地方行政官が交代するときに総督あてに提出した申し送り書（Memori van Overgave）や、日常的な報告や何らかの事象に直面した場合に送る郵便報告書（mailrapporten）の2種類、並びにそれに基づいて政庁側から各地方の行政官にあて発信された書簡類である。それらのいずれにおいても、当時の社会状況が詳細かつリアルに報告されている。とりわけオランダ植民地政庁が1913年から1914年にかけて日本人商人たちの活動を監視する中でまとめた各種の極秘の報告書は、非常に重要な情報を提供してくれた。

さらに、当時の中央銀行であったジャワ銀行の資料も活用した。これは現在のインドネシア銀行本店（首都、ジャカルタ）に所蔵されていることが1982年に明らかになったもので、公開されているが、まだ余り多くの研究者が活用していない。1828年から1953年までのデータがあり、主として国家ならびに各州の財政に関するものが多いが、本研究で利用したのは、中央銀行本店と各地の支店との間で交わされた顧客に関する情報である。この中に何人かの日本人顧客の名前が見出される。この資料は膨大であり、筆者はまだその全貌にアクセスできていないため、本稿が主として扱う時期に直接関係のあるものはまだ見つからないが、「オランダ領東インドにおける日本の経済進出の証拠（Stukken Inzake de Economische Penetratie van Japan in Nederlands-Indie）」と題する文書が、1922年以降の日本人の経済活動について詳細な情報を伝えている。とりわけ地域別の日本人居留民の人口（1930年統計）や、日本関連の輸出入量、日本に対して課された輸出割当量などについて詳細な情報を載せている。この文書は、日本人に対して明らかにスパイのレッテルを貼るようになった1930年代のオランダ政庁の見解をよく反映している。

第 1 章 オランダ領東インドにおける日本人移民の歴史

1. 日本人移民の先駆者たち：「からゆきさん」と売薬行商人

オランダ領東インドに渡った初期の日本人移民の多くは「からゆきさん（別名、^{ろうしぐん}娘子軍）」と呼ばれる女性たちであった。貧しさゆえに海外へ身売りされ、売春を生業とさせられた女性たちである。「からゆきさん」は、中国との貿易の拠点であったシンガポールやマカッサルを経由し、バタビアやスラバヤ、スマランといった大きな港に渡来した。矢野暢は、1873年にスマトラ島北端の港町アチエに渡来した一人の女性が「からゆきさん」第一号であるとしている [矢野 2009 (1975): 16-17]。

「からゆきさん」という呼称は、「中国へ渡る」という意味の「唐行き」から来たものと考えられているが [森崎 1976: 17-18]、実際の渡航先は様々であった。森崎和江によると、「からゆきさん」は、1868年に始まる明治時代、シベリア、満州を含む中国、東南アジア、南太平洋地域、インド、アメリカ合衆国、アフリカなどに渡り、各地の娼館で働かされた日本人女性を指す。

東南アジア、特にオランダ領東インドとイギリス領地域に渡った「からゆきさん」は、人数こそ多くないが、日本の経済的進出において重要な役割を担った [Shimizu 1991: 30-31]。1880年代には、「からゆきさん」が、東南アジアのいくつかの都市に渡来したことが確認されている。当時の彼女たちの活動の中心の一つは、イギリス統治下にあつて、オランダ領東インドへの玄関口ともなっていたシンガポールであった [Warren 1993: 69-71; 橋, 2003: 1-14]。その後、「からゆきさん」は、北スマトラのメダン、南スマトラのパレンバン、バタビア、スラバヤなどオランダ領東インド各地の娼館へ送られた [矢野 2009 (1975): 23]。

詳しくは第2章で論じるが、「からゆきさん」の渡航がきっかけとなり、続いて日本から男性の売薬商がオランダ領東インドへと渡ることになる。彼らの商業形態は、行商であった。後述するように、当初は、「からゆきさん」の従事する売春につきものの性病を治療する薬の販売が主たる狙いであった。しかし徐々に商品の種類と販路を拡大し、1913から1914年のピーク時までには、中部ジャワのスマラン (Semarang) を拠点として、広くジャワ島住民の生活に浸透していった。両者とも、比較的富裕層に属する人々の需要を満たす役割を果たしていた。

1907年以降、「からゆきさん」がオランダ領東インド植民地政府の監視の対象となり、1912年にイーデンブルフを総督とする植民地政府により売春禁止令が施行された [Shimizu 1991: 40]。この売春禁止令施行の背景には、オランダよりも、「娼婦の供給先」との汚名を返上したい日本側の意向が働いたことが大きかった。

「からゆきさん」という職業がどのように終焉を迎えたかについては、ほとんど明らかになっていない。「からゆきさん」の一部はその後日本へ帰国したが、大半は、日本へ帰国する費用も持たず生活に困窮しながらも、様々な形で現地に根づいていった。

オランダ当局は、「からゆきさん」たちについて、ほとんど記録を残していない。オランダ文書館にある数少ない資料の中で、「からゆきさん」に関係するだろうと思われる資料は、オランダ領東インド当局のまとめによる日本人送還申請書類 [NH-HaNA, Secretary General of Netherlands Indies Government, 1942-1950, access no. 2.10.14, inv. no. 5312] の中にみられる女性名くらいであろう。しかも、女性の名前以上の情報がないことから、元「からゆきさん」であろうという推測の域を出ず、それ以上の情報を得ることは困難である。

表1 オランダ領東インドにおける邦人（ジャワ島とジャワ島以外）

年	ジャワとマドゥラ島（人）	ジャワ以外（人）	合計（人）
1905	229	768	997
1916	1110	2846	3956
1920	1734	2414	4148
1926	2110	2414	4351
1930	3983	3212	7195
1934	3841	2697	6538

出典:旧ジャワ中央銀行公文書「オランダ領東インドへの日本の経済進出」添付4号(1933)、および、「日本外交史本邦移民関係雑件南洋ノ部」(1939)の数値をもとに、筆者が作成。

2. 日本人社会の変容： 個人移民から企業の進出へ

「からゆきさん」の存在を足掛かりに、日本人男性の行商人がオランダ領東インドで活動を始めるのが、19世紀の末であった。その後、トコ・ジュバンと呼ばれる個人経営の商人の渡航が始まり、さらに1910年代になると、企業による進出が主体となった。つまり、オランダ領東インドへの日本人移民の社会的背景が徐々に変化し、いわゆる「下等」とされていた娼婦、それに続く行商人、地域に定着した日本人商店、さらには社会の「上層」に位置する企業、銀行等へと日本人移民の社会・経済的帰属が、変容していったのである。

1899年、オランダ領東インドにおいて、日本人は、法的にヨーロッパ人と対等の地位として扱われることが決定した。1909年には、バタビアに日本領事館が開設された。1913年には、同じバタビアに日本人会が発足し、その後、スマラン、スラバヤ、マカッサルにも、次々と日本人会が誕生した。オランダ領東インドの初代日本領事の染谷成明は、各地方の日本人移民を掌握し、彼らを外交的管理下に置いたのである [橋 2002: 111-147]。

ここに至るまでの日本人居住者の人口の変遷を一旦整理しておこう。日本人移民の数は、1890年から1910年の間、500人から1500人に増加したに過ぎなかった [Murayama 1993: 91]。オランダ政府の統計⁴⁾によると、1905年、オランダ領東インドに住む日本人は1079人であったが、1930年には、7倍近く増加し、7195人となった。オランダ植民地政府の分類に基づくと、1930年代に、オランダ領東インドに在留した日本人の半数以上は、小規模商人、つまり一般雑貨屋を営む人々であった。1910年代半ばから1920年代にかけ、日本人移民の多くは、売薬商であり、そのうちのほとんどが男性であった。

1930年代末以降、日本人の商業活動は、日本政府が提唱する「大東亜共栄圏」樹立構想という国策に組み込まれ、彼らの経済活動が、「南進論」の高まりの中で、国家の政治的意向に大きく左右されていくことになった [Shimizu 1980: 44; Astuti 2008: 64-76; Post 1996: 302; Goto 1997: 49-71]。また日本の大企業の進出による影響も大きかった。1940年から1941年には、オランダ領東インドにおいて51の日本人会があり、各会の指導層は、各都市の財閥系企業の駐在員たちにより独占されていた (Post 1996: 301)。このことは、この時期、初期のトコ・ジュバンの開拓者たちが、大規模資本と政治的利害により、すでに脇に追いやられた可能性を示唆するものであろう。

「大東亜戦争」勃発直前、日本への最後の帰国船、富士丸が、オランダ領東インド各地を経由して

1941年12月10日に無事に九州の長崎に到着した [ジャガタラ友の会 (編) 1987: 204]。その一方で、同年12月8日、オランダ領東インドでは、オランダと日本が交戦状態に入ったと同時に、現地に残留していた日本人はオランダ当局により逮捕され、拘留された。1942年1月9日、日本人捕虜2093人 (大半が男性) は、バタビアのタンジュン・プリオク港から、連合軍捕虜船でオーストラリアのラブデイ (Loveday) ならびにタトゥラ (Tatura) の抑留所へと送られた。オランダ領東インドにおける日本人移民の歴史は、ここで一旦、幕を閉じることになる。

第2章 オランダ領東インドにおける日本人売薬商の時代背景

1. からゆきさんと性病

「からゆきさん」たちは、その仕事柄、性病という問題に常に悩まされていた。その一つの例が、梅毒である。複数の先行研究から、梅毒をはじめとする「からゆきさん」たちの性病治療を主たる目的として、オランダ領東インドに日本人売薬商の渡航が始まったことが明らかにされている [De Jong 1985; Boomgaard 2007; 村上 (執筆年不明)]。

ボームガードは、20世紀のオランダ領東インドにおける淋病と梅毒を中心に論じている。バンドンにある市民病院 (Burgerlijk Ziekenhuis) の1920年のデータによれば、3722人いる患者のうち、11.5%が性病患者であり [Boomgaard 2006: 21]、当時、性病が大きな問題であったことがうかがえる。またこれ以外にも、恥じて医師の診断・治療を受けようとしない性病患者もいたであろうことから、正しい患者数はこれよりかなり多いと考えられる。

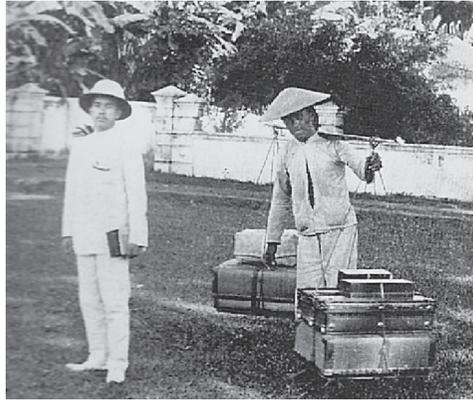
このような状況下、日本人売薬商は「からゆきさん」に対する性病治療薬の供給を通じて、オランダ領東インドで活躍する機会を得た。そして時が経つにつれ、現地住民の間でも需要があると知り、彼らに対する薬の販売を開始した。またポストは、日本人売薬商が現地住民への薬品販売へと移った背景には、植民地政府による、1912年の売春禁止令の施行があると指摘している [Post 1991: 170]。つまり、重要な顧客であった「からゆきさん」たちがいなくなったのである。

2. 日本人売薬商の活動

オランダ領東インドにおける日本人の商業活動は、先に述べた通り、固定商店 (一ヶ所に定着し商店を開くもの) と、行商人の2種類があり、1913年頃までの日本人商人たちは、後者のタイプが主流であった。行商人の特徴は、白衣を纏い医者のような身なりをして、現地住民を1人か2人雇い、さらに華人を商売の仲介人あるいは通訳として同伴することもあった (写真1)。

日本人商人による行商は、大規模な資本による企業が進出してくるにつれ徐々に減少していったが、1920年代にも存在した。この点は1920年3月1日の日刊紙『爪哇日報』でバタビアの百々商店が「売薬行商人募集」の広告を出していることから明らかである。

こうした日本人売薬商の活動は、オランダ領東インド全域、特に各地の都市に広がっていた。なかでもジャワ島のスマラン (Semarang) は、初期の日本人商人たちの拠点となった都市であり、1910年代には、売薬行商人の活動の中心地でもあった [Murayama 1993c: 102-103; National Archive of the Netherlands, The Hague, Ministerie van Koloniën: Geheim Archief (Ministry of Colonial: Secret Archives), 1901-1940, access number 2.10.36.51, inventory number 161 (植民地省), スマラン理事官 (resident) の報告1913年11月26日]。そして、スマラン地域の売薬行商人の中には、その後、スマラ



[写真1] 大友信太郎（写真左）の行商の様子。白い服を着て、医者のような身なりをしている。現地住民を雇い、商品を行李に入れて、天秤棒で担がせ、運ばせた。〔(出典) ジャガタラ友の会（編）1987: 14〕

ンを拠点にビジネスを拡大していく者たちも現れた。

スマランを拠点とする売薬行商で成功し、その後、一か所に定着し商店を開くようになった者の中に、小川利八郎、堤林数衛、大友信太郎、横山平四郎らがいる。その後、小川、堤林、横山はスマランで、大友信太郎がテガル（Tegal）で店を構えた。

小川洋行を創立した小川利八郎は、オランダ領東インドで成功をおさめた売薬行商人の一人であり、当地の薬品販売業において極めて重要な人物である。千葉の豊岡村の武家に生まれた小川は、1900年代初頭にジャワに渡航した。最初の3年ほど、行商で生計を立てた後、スマランに商店を起し、その後、スマランに本店、ジャワ島に6つの支店を展開し、薬、衛生用品などの日本商品を販売した。そのビジネスは、1913年には、オランダ領東インド全土で43の取引先を確保するまでに拡大した [Post 1996: 308]。

スマランの理事官のヴォーゲル（Vogel）によると、1909年以来、スマランには薬を行商してまわる、いわゆる売薬商が多くいた。彼ら売薬商たちが連日、街の大通りで仁丹や目薬等、極めて簡素な家庭常備薬を売り歩く姿が見られた。スマランは商品販売の激戦区であったため、そこでのビジネス戦略は、他の地域と様相を異にし、その成功には格段の努力が必要であった。日本人商人たちは、商品を広くジャワ人社会に浸透させるため、サービスを充実させ、良質の商品を取り扱うなど幾つもの工夫を凝らさねばならなかった。また彼らは、潜在的な競争相手であった中国人との衝突を極力避けることにも努めた。例えば、小川利八郎は現地住民の中でも、エリート層に特化した商売を展開した。一方で、華人商人たちと提携し、商品販売の相乗効果を狙う日本人商人たちもいた [NH-HaNA, MvK（植民地省）、1913 スマラン理事官の報告1913年11月26日；Murayama 1993: 98; Post 1991: 77]。

他方、ジャワ以外の地方では、日本人商人の存在感は幾分小さく、それゆえオランダ領東インドの警戒心もさほど強くなかったようである。スマトラのタンジュン・バレー（Tandjoeng Bale）においては、地方へ移動するのも困難で、日本人商人が交通の便が悪い地方まで行くことは稀であった [NH-HaNA, MvK（植民地省）、カリモン監督官の報告1913年12月24日]。彼らの経済状況は、多額の交通費を捻出するほど余裕がなかったと考えられる。従って現地の人々との接触はさほどなく、憂慮されるほどのことはなかった。



[写真2] テガルの大友信太郎のトコ・ジュパン。店の外壁に仁丹の広告が描かれている(1916年)。[(出典) ジャガタラ友の会(編) 1987: 19]

一方でスマトラ西海岸州知事 (De Gouverneur van Sumatra's Westkust) をはじめとする西スマトラ各地 (バトゥー (Batoe), ムンタウエイ (Mentawai), バティプー・パリアマン (Batipoeh/Pariaman) 県など) の 副理事官 (Assistant resident) からの書簡を見ると、これらの地域では日本人の売薬商の数も少なかったようで、日本に対する脅威はほとんど表明されていない。

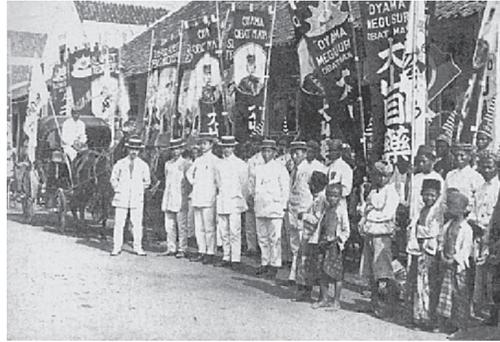
3. 仁丹と目薬

この時期、日本人商人による薬品販売が盛んになった理由は、「からゆきさん」の性病問題と並んで、日本国内の製薬業界における商品開発の活発化と生産量増加により、新しい市場が必要とされていたという事情がある。本節では、1910年代に日本人売薬商の主要商品であった仁丹と目薬に焦点をあて、オランダ領東インドにおける薬の販売活動を検証する。

森下南陽堂(現、森下仁丹株式会社)により、1905年に開発され、日本での販売が開始された仁丹は、戦前の日本の製薬産業の成功を象徴する商品であり、その販路は、国内に留まらず、中国やインド、東南アジアなどアジア各地に拡がっていった⁵⁾。仁丹は、梅毒やコレラなどの毒消しに効果があると信じられていた(その前身は1900年開発の「毒滅」)。米国医師会 (American Medical Association) など世界的に権威ある団体が、当時からその効用を疑問視しているにもかかわらず、中国や東南アジアの市場で大きな成功をおさめた。その理由は、コ克蘭によれば、その巧みな広告戦略にあるという [Cochran 2006: 44]。

オランダ領東インドにおいて仁丹は、主要な日本商品であり、当時のムラユ語⁶⁾の綴り方を踏襲し、Djintanという名称で販売された。ジャワの売薬行商人の先駆者の一人である大友信太郎も、仁丹を販売した。1916年に撮影されたテガルの大友の商店の外壁には、仁丹の広告が大きく描かれている(写真2) [ジャガタラ友の会(編) 1987: 44]。

仁丹のちに日本占領期にも再登場し、プロパガンダの一つの手段となった。この時期の仁丹の販売には、制服を着たドイツ宰相ビルマルクのトレードマークと、「この日本の将軍はオランダをやっつける (DJINTAN=Djenderal Jepang ini Akan Antam Nederland)」の略語であるとの宣伝文句が用いられ、日本軍のプロパガンダ工作でも活躍することとなったのである。この結果、仁丹は日本人行商人に



[写真3] 小川洋行の「大山目薬の 宣伝」(1911年頃)。白衣の日本人売薬人の他、現地住民たちの姿が多数見られる。「大山目薬」ののぼり広告には、日本語表記と共に、ムラユ語表記がされている。[(出典) ジャガタラ友の会(編) 1987: 19]



[写真4] スマランの横山商店(1907年)。ローマ字表記の商店名(H. YOKOYAMA & Co)が書かれた両脇には、主要商品であった目薬「天秤マーク」のロゴが描かれている。また正面入り口の4本の柱には、左からそれぞれに、サンスクリット語、ムラユ語、日本語、アラビア語の表記が見られる。[(出典) ジャガタラ友の会(編) 1987: 13]

対する誤ったイメージをインドネシア人やオランダ人に植え付ける要因となった。

仁丹以外に、目薬もまた、日本人売薬商たちによって、多く販売された薬の一つである。この目薬の販売促進のため、彼らを用いたのぼり広告や立て看板では、日本語以外に、現地住民が話す言語が使われており、現地住民たちがこの商品販売の顧客ターゲットになっていたことが分かる。また、トコ・ジュパンでは、販売促進の宣伝活動を熱心に行い、これには現地住民も多く集まった(写真3, 写真4)。現地住民が、目薬をはじめとするこの時期の日本商品の主要な消費者であったことが、ここからも推測できる。

当時の主要な目薬には、小川洋行で販売された「大山目薬」と、横山商店で販売された「天秤マーク(tjap timbangan)」があり、両商品は、行商期の日本人売薬商の主要商品でもあった。スマランにあった横山商店の正面入り口には、日本語の他、ローマ字表記のムラユ語、アラビア語、サンスクリット語でそれぞれ店名と宣伝文句が書かれている(写真4)。このことから、横山商店が、ムラユ語を話す現地社会の住民を顧客ターゲットとし、また、アラビア語表記によって敬虔なイスラーム教徒を、ま

たジャワ人に対しては、ジャワ文字を使用することによって、プリアイ (Priyayi: 原住民エリート官僚) や他のエリート層の関心を引こうとしていたことがうかがえる。

第3章 日本人売薬商の活動に対するオランダ政庁の危惧と監視

1. ヴェットウムの書簡

1913年9月10日に対日・対中国商業問題顧問のヴェットウム (Wettum) が、オランダ領東インド総督 A. W. F. イーデンブルフに、売薬商の流入を危惧する内容の書簡を送った。その中でヴェットウムは、中国、フランス領インドシナ、オランダ領東インド、英領マラヤにおける日本人商人たちの活躍に関し以下のような危惧を表明していた。

ハワイやアメリカ本土への輸出品は、大部分が現地の日本人自身を主たる対象としているため、その重要性は低い。しかしながら、中国、英領植民地、フランス領植民地、そしてオランダ領東インドでは、現地住民を主たる消費者とする日本製品の流入量が、年々増加している。また、この地域の日本人商人の数は、すでに数千人に達している。

…薬販売業は、南洋において拡大し続ける日本社会の諸活動の中で、最も主要なものである。彼らは、1人か2人の原住民を連れて商品を運び歩き、まるで医者のように見受けられる。日本の薬品の販売活動はすでに南洋において成果を示し始めている。ドイツの薬を模倣して作っている日本製品と中国製品は形が似ていて競争が発生しているが、一般的に日本製のほうが品質がよい。

…彼ら (日本人商人) 達を侮ってはならず、しっかりと監視をしなければ、将来、脅威となる可能性がある。

つまり日本人商人たちは、現地住民を顧客としていたため、植民地当局は強い警戒心を持っていた。オランダ政府は、これが現地住民に対する日本人の政治的なプロパガンダ活動に発展することを恐れていた。当時、オランダ領東インドの統治を脅かす危険性のあるあらゆる動きが警戒の対象となっていたが、それは1909年に民族主義団体ブディ・ウトモ (Budi Utomo)⁷⁾が、また1912年にサレカット・イスラーム (Sarekat Islam)⁸⁾が誕生したことと無関係ではない。つまり現地住民の政治的覚醒が高まり、これによって、オランダ領東インドの政治的緊迫度が一気に高まっていたのである。

2. 官房長官モレスコの回状と各地の反応

先の書簡に応じて、1913年10月3日に政庁官房長官モレスコ (E. Moresco) は各地域の地方政府に対して、日本人売薬商の活動を監視し、報告書を提出するようにという趣旨の秘密の公式書簡371号を出した。その中で、特に以下の3点に注目して回答するようにと要請していた。1) 「本当に薬の販売を行なっているのか、あるいはそれ以外に目的があるのか」。2) 「態度や行動に問題がないかどうか」。3) 「現地住民との交流があるか」。

モリスコの回状に対して、1913年10月7日から1914年5月7日にかけて、表1に列記したように28地域から報告が届いた。

以下、各地のオランダ人行政官からの報告内容を紹介しよう。報告の内容は、日本人商人の現地住民に対する振る舞い、彼らの「からゆきさん」との関係、そして地域住民との交流など多岐に渡っている。

表1 オランダ領東インド政庁の地方政府に対する監視指示 記録 (1913-1914)

No	地方	作成年月日	作成者
1	バタビア (現: ジャカルタ)	1913年9月10日	対日・対中国商業問題顧問 ヴェットウム (Wettum)
		1913年9月10日	バタビア理事官 (ライスナイダー) (Ryfasnyder)
		1913年10月7日	"
		1914年1月12日	"
2	ブイテンゾーグ (現: ボゴール市)	1913年10月2日	オランダ領東インド政庁官房長官E. モレスコ (E. Moresco)
		1914年2月11日	
3	バメカサン (現: マドゥラ島)	1913年11月14日	マドゥラ副理事官 (名前記載なし)
4	スマラン (現: 中部ジャワ州)	1913年11月26日	スマラン理事官バン・ヴォゲル (van Voge)
5	チェリボン (現: 西ジャワ州)	1913年11月28日	チェリボン理事官 モール (Moore)
6	センカン (現: 南スラウェシ州)	1913年11月4日	ワジョ監督官フードハート (Goedhart)
7	バンカル・ピナン (現: バンカ・ベリトゥン州)	1913年12月1日	バンカと付属地域理事官エンゲレンベルグ (Engelenberg)
8	バダシ (現: 西スマトラ州)	1913年12月1日	スマトラ西海岸州知事バロー (Ballot)
9	スラカルタ (現: 中部ジャワ州)	1913年12月3日	スラカルタ理事官バン・ウェイク (Van Wyk)
10	クラテン (現: 中部ジャワ州)	1913年12月2日	クラテン副理事官 ハールロフ (Harloff)
11	スラバヤ (現: 東ジャワ州)	1913年12月3日	スラバヤ理事官ファン・アールスト (Van Aalst)
12	バンドン (現: 西ジャワ州)	1914年1月8日	バンドン理事官マース・ヘストラヌス (Maas van Gestranus)
13	マカッサル (現: 南スラウェシ州)	1913年12月1日	セレベスと付属地域の知事ヘウグティグ (Hegting)
14	タンゲラン (現: 西部ジャワ州)	1913年11月1日	副理事官ライファスナイダー (Ryfasnyder)
15	タンジュン・ピナン (現: リアウ州 (スマトラ島))	1914年1月7日	リアウ理事官ブラオアノコプス (De Bruyn Kops)
16	タンジュン・パレー (現: 北スマトラ州)	1913年12月24日	カリモンの監督官ホースト (O. Horst)
17	タンジュン・プリトン (現: バンカ・プリトゥン州)	1913年11月26日	プリトン島タンジョンの市民知事バンケルクホッフ (Van Kerkhoff)
18	ベヌバ (現: リアウ州)	1913年11月30日	リンガの監督官 スケッフェー (Scheffer)
19	シンガラジャ (現: バリ州)	1914年1月28日	バリとロンボック理事官ベーンホイゼン (Veenhuijzen)
20	マナド (現: 北セレベス州)	1914年1月15日	マナドの理事官マーレー (Marle)
21	マゲラン (現: 中部ジャワ州)	1914年3月12日	ケドゥの理事官ベークウィック (Verwyk)
22	クバン (現: スサ・テンガラ・ティモル州)	1914年1月10日	ティモル島と付属地域の理事官マイエル (Maier)
23	アンボイナ (現: マルク州)	1914年1月26日	アンボイナの理事官ラーエド (Raedt. v.o)
24	バンジャルマシン (現: 南カリマンタン州)	1914年1月14日	南部・東部ボルネオの理事官ライクマンス (Rijckmans)
25	ジャンビ (現: ジャンビ州)	1914年1月17日	ジャンビの理事官 エマン (Eman)
26	マディウン (現: 東ジャワ州)	1914年1月24日	マディウンの理事官バンデベンター (van Deventer)
27	クタラジャ (現: アチェ州)	1914年1月12日	アチェの市民と軍事担当知事 (スワート) (Swart)
28	ジョグジャカルタ (現: 特別ジョグジャカルタ州)	1914年5月8日	ジョグジャカルタ理事官バン・バイレベト (Bylevet)

日本人の現地住民に対する立ち居振る舞いについてのマドゥラの副理事官 (Assistent resident) からの報告は、「およそ1ヵ月に2度のペースでここを訪れる日本人の売薬商たちは、一度たりとも現地住民に興味を示すことなく、常に華僑が集まる場所を探していた。彼らにとってムラユ語は不慣れのように、語学力は乏しかった。そういった理由から、商品を販売する際には、通訳を手掛ける華僑が常に存在した。」と述べている⁹⁾。なお、これと同様の内容が、バタビア、バンドン、リアウ (Riau) の理事官や、カリモン (Karimoen) の監督官からの報告にも見受けられる。

このように各地方のオランダ人理事官や監督官の一部は、日本人商人が現地の人々と意思疎通を図るための言語能力を持ち合わせていないと判断していた。当時の日本人商人たちのムラユ語およびジャワ語の能力は大変低く、話す言葉が珍妙にさえ聞こえたと言っている。

語学力の問題に加え、現地住民に対して横柄な態度をとることもあったとの指摘がある一方で、現地住民が日本人を快く受け入れたケースも報告されている。ジョグジャカルタの理事官やカリモンの監督官によれば、日本人商人に宿泊所を提供する現地住民も存在したという。

また別のいくつかの報告の中では、日本人は現地のリーダー達とだけ交流していた程度であると述べられている。その例として、ジョクジャカルタの理事官によれば、グヌン・キドゥル (Goenoeng Kidool) の重要人物と交流があった日本人のことが指摘されている。また、南スラウェシのワジョ (Wadjo) の監督官によれば、ある日本売薬商はセンカン (Sengkang) のブギス人貴族アンディ・オダン (Andi Odang) との交流があったという。

オランダが最も気にしていたサレカット・イスラームのメンバーたちとの関係であるが、サレカット・イスラームの人々は、華人とのビジネス・ネットワークを断ち切るため、日本人商人に近づいた。ポストによれば、サレカット・イスラームと日本人商人のつながりは、特に中部ジャワや東ジャワにおいて、非常に重要な意味を持っていたという [Post 1996: 91-92]。

たとえば、クラテンの副理事官の報告 (1913年12月21日付け) には、以下の内容が含まれている。「ムンティラン (Moentilan) のサレカット・イスラームは、ジョグジャカルタ在住の日本人商人 K. トミマスという人物が調達した日本製の機器を以前より使用している。この製品購入の際、製品が故障し使用できなくなった時には、K. トミマスが引き取るか、転売する場合には、『原住民』のみを対象とし、決して華人に転売しないという約束が交わされた。」。日本人のサレカット・イスラームへの協力の原動力は、華僑による日本製商品のボイコットを運動¹⁰⁾に対する恨みに他ならない。同団体のメンバーおよびジャワの住民たちもまた、華僑たちを嫌っていたのである。

そのような中でスパイではないかと疑われる人物が存在することを、タンゲラン (Tangerang) の監督官が報告している。それはマキオ・オノデラという人物で、彼は現地住民に金を盗まれたと訴えてきた。しかし、監督官は、カメラと地図を携行し、3日間で複数の地域を移動したオノデラを疑い、このことが、ジャワにおいて日本人スパイが活動していた証拠であると述べている。

しかし、どの地方行政官も誰一人として、政治と関連した活動を報告してくる者はいなかった。現地住民が日本人に煽られて革命を起こすといった行動は見られない。にもかかわらず、オランダ領東インド政庁の日本に対する懸念は、根強くあった。つまり中央政庁の高級官僚と地方の行政官たちとの間の認識に温度差が見られるのである。

オランダ人研究者 ケース・ファン・ダイク (Kees Van Dijk) は、報告に接してオランダ当局が抱いた不安を「日本恐怖症 (japannersvress)」という用語で表現している。ダイクは、厚いひげを生やし



[写真5] 南洋商会の堤林数衛が現地人クーリーに荷物を運ばせている。堤林は地図を片手にポーズを取っている(1909年頃)。[(出典) ジャガタラ友の会(編) 1987: 14]

たいかつい顔つきのドイツの宰相ビスマルクの肖像(仁丹の創業者の森下博によれば大礼服を着た「薬の外交官」)をロゴにした仁丹を引き合いに出し、日本人の脅威をシンボリックに書き立てたのである[Van Dijk 2007: 83]。

スマランやチェリボンの理事官は、現地住民の間で日本人商人は日本のスパイだという噂が飛び交っていると報告しているが、プロパガンダ行為を発見することはなかった。日本人売薬商たちの語学力(ジャワ語もしくはムラユ語)不足も考慮すると、彼らをスパイとみなす理由は十分ではなかったようだ。

数千人におよぶ日本人商人、とりわけ売薬商たちは、医者のような格好をし、簡易ではあるが医療器具を持ち合わせていたことから、現地住民の信頼感も厚く、受け入れやすかったのであろう。さらに、売薬商が登場する以前は、「醜い職業(leelijk beroep)」である娼婦、つまり「からゆきさん」が主な移住者であったのに対し、彼らのような「健全な」商人達は好まれた。

当時は日本人の居住や移動をオランダ当局が制限し、嫌がらせをするケースもあった。たとえば、1909年に小川洋行に就職した岩井八三郎本人の証言によると、彼はバタビア政庁より、商業活動のための6種もの許可書を取得済みであったにもかかわらず、実際の商業活動は非常に困難な経験をした。岩井は1913年3月14日から18日まで、薬品販売のため、バンドンからスマランへの移動中、宿泊先のボイデンゾルフで現地の警察に持ち物を調べられた上、弁明すら聞き入れられず、投獄されてしまった。バタビアの浮田日本領事がオランダ領インド総督に提出した抗議文によると「彼は、原住民と一緒に投獄された上、食事も与えられなかった」という。

実際に、オランダ側の日本人商人に対する態度や心情は、一般にかなり冷淡であった。この点に関し、1924年に在オランダ日本総領事は、日本人商人たちの状況に触れ、オランダ領インド政庁はあまり良い心象を持っていない旨、書き記している。その一方で、オランダ政庁による日本人商人に対する批判的見解について、バタビアの日本人領事館が強く抗議したという記録も残されている[矢野2009(1975): 311-313]。

オランダ当局や一部の現地住民が、表面には表れない日本人行商人の「真の目的」を探ろうとした背景には、現地の習慣とは相容れない日本人独特の行動様式があったからだとも考えられる。その代表的な例として、先のマキオ・オノデラのケースに見られるように、しばしば日本人がカメラや地図を常に携帯していたことが挙げられる。カメラを首からぶら下げた姿は、当時の状況を記録した写真より知ることができる [バタビアの浮田領事からオランダ領東インド官房長官 (1sten Gouvernment Secretaris) キンデルマン (H. A. Kindermann) への手紙, 1914年9月13日と1914年9月1日]。古くから地図作りが発達し、特に遠出の際は地図を携帯する習慣が身につけていた日本人にとっては、地図は、当然持つべき備品の一つであったろう。しかし、オランダ領東インド当局や現地住民にとっては、一般人が携帯するにふさわしくない備品であったと思われる。日本人にとって、外出時の不可欠な道具であったカメラや地図が、オランダ当局や、オランダ側の見方に影響を受けていた現地住民には、「スパイの道具」にしか映らなかったのである。

一方で、同じジャワ島内部でも、大きな規模の商業基地を擁するスラバヤの理事官からの報告では、日本人商人について疑惑を持っているような記述は見られない。同理事官は、さらに一步踏み込んで、日本人商人のジャワへの到来の真意を疑うような報道については、気に留めるに及ばないと明言している。さらにバンドンの理事官は「日本人の行商人の活動は、厳しく取り締まるが、これまで彼らは薬品の販売以外の活動には従事していないと思われる。また、彼ら行商人と「からゆきさん」と呼ばれる女性たちとは、関わりがないことも明らかである。」と報告している。このように日本人の進出の度合いや活動の内容は、地域によってかなり差があった。

結局のところ日本側の資料によるとスパイ行為の事実はなく、純粹に商売をしているだけであった。たとえば堤林和衛は、キリスト教信者であったため、商売は利益の為だけではなく、現地住民のための奉仕活動、宣教活動として行なっていたという [矢野 1977: 315-319]。

しかしながら1930年代になると、オランダ領東インドに在住する日本人の意識が政治的に変化していくこととなった。日本人居留民の中には、強い国民意識を持ち、「南進論」を支持する者や、インドネシアの独立精神を後押しする者も出現したのである [石居 1978: 128; Shimizu 1991: 54; Goto 1997: 230-239]。

結論

本稿の目的は、1900年代から1910年代にかけてのオランダ領東インドにおける日本人商人、中でもとりわけ存在が目立った売薬商の活動に焦点をあて、その特徴を描き出すとともに、オランダ当局が、植民地の経済と政治を脅かす存在として、かなり早い時期から彼らの活動に対して警戒の目を向けていたことを指摘することであった。

この地に進出した最初の日本人は、「からゆきさん」と呼ばれる娼婦たちであった。その後、彼女たちの間に蔓延していた性病を治療するという名目で、日本からの初期の商業移民たちが薬を持ち込み、小規模に販売し始めたことが、その後の日本の薬品の大規模な進出へとつながり、日本人商人の中でも売薬商が目立つようになった。これらの売薬商は、行商と言う形で各地を歩き回り、現地住民との間に様々な接点を持ったため、オランダ政庁はその動きに対して警戒心を抱くようになった。

同政庁は1913年に、官房長官を通じて秘密裏に、各地の地方行政官あてに回状を発送し、日本人売薬商の活動を制限し、監視することを命じた。官房長官の命令に対して1913年10月から1914年5月に

かけて28の地方の行政官から文書で報告が送られた。それらには、日本人商人と「からゆきさん」との関係、日本人商人の現地住民に対する振る舞いや現地住民との交流などが記されている。オランダ人が抱いた不安や恐れは、おそらく日本が、オランダ領東インドにおいて経済を浸透させることに成功した初めてのアジアの国であるということ [Booth, 1994: 45] に起因するであろう。またそのほかにも、日本人の文化や、現地住民との交流方法が欧米のそれとは大きく異なっており、行動が予測できないこともまた、オランダ人たちの不安を助長させる原因となった。

それゆえ日本人商人に対する逮捕事件が起こったり、時には、日本人商人は日本のスパイだというような噂が飛び交ったりした。しかしながら、政治的プロパガンダ行為が発見されることはなかった。各地からの報告書には地域差があるものの、一般的に、中央の政庁が抱いていたような危惧を確認するような内容のものは少なかったのである。すべては政庁の過剰反応であった。そもそも日本人売薬商たちのジャワ語やムラユ語の言語力は満足のいくレベルではなく、現地住民たちと十分なコミュニケーションを図ることすら難しかったことから、華僑を通訳として同伴する行商人もいた。この時期の日本人商人たちをスパイとしてみなすには、根拠が不十分であると言える。

しかし1913年から1914年にオランダ政庁が抱いていた危惧は、その後1920年代や1930年代には現実のものとして大きく膨らんでいくことになる。1920年代になるとオランダは、第1次世界大戦を経て大幅に拡大した日本の対オランダ領東インド貿易量に危惧を抱き始め、1930年代になって日本が満州や中国各地へ侵略するようになると、これは政治的な危惧へと変わっていった。こうして、日本人はほぼ全てが諜報員であったのかのようなイメージが広く共有されていくようになる。その伏線として、1900年代から1910年代の日本人売薬商の活動と、それに対するオランダ植民地関係者の様々な反応は非常に重要なものであると思われるのである。

参考文献

著作・論文（日本語）

- 後藤乾一（1986）.『昭和期日本とインドネシア—1930年代「南進」の論理・「日本」の系譜』勁草書房.
 後藤乾一（編）（1987）.『わが青春のバタビア若き調査マンの戦前期インドネシア留学日記』. 龍溪書舎
 後藤乾一（1989）.『近代日本とインドネシア—「交流」百年史—』北樹出版.
 後藤乾一（1994）.「近代日本・東南アジア関係史論序説」『ナショナリズムと国民国家』（講座現代アジア1）東京大学出版会.
 後藤乾一（2010）.『近代日本と東南アジア』岩波書店.
 橋重 孝（2002）. オランダ領東インドにおける日本人の経済活動について—1910-20年代の東ジャワを事例として—『金城学院大学論集』人文科学編 第35号, 111-152.
 橋重 孝（2003）.「オランダ領東インドにおける日本人会と日本人学校（1）—昭和初期、ジャワ社会を事例として」『金城学院大学人文・社会科学研究所紀要』第7号, 1-14.
 石居太楼（1978）.「『半世紀の歩み』の特質（近代日本の南方関与）」『東南アジア研究』16(1): 119-135.
 ジャガタラ友の会（編）（1987）.『写真で綴る蘭印生活半世紀：戦前期インドネシアの日本人社会』ジャガタラ友の会.
 倉沢愛子（1992）.『日本占領下のジャワ農村の変容』草思社.
 倉沢愛子（1992）.「インドネシア」『近現代史の中の日本と東南アジア』東京書籍.
 森崎和江（1976）.『からゆきさん』朝日新聞社.
 清水 元（編）（1985）.『両大戦間期日本・東南アジア関係の諸相』アジア経済研究所.
 白石 隆（編）（1980）.『オランダ旧植民地省文書館における日本および日本人関係文書目録特定研究』東京大学教養学部国際関係論研究室.

- 杉山伸也 (1985). 「日本綿品のアジア市場進出とイギリス資本の反応 (1890 ~ 1940年) —マンチェスター商業会議所資料を中心として」清水元 (編)『両大戦間期日本・東南アジア関係の諸相』47-78 アジア経済研究所1986年.
- 武田重三郎 (編) (1978). 『ジャガタラ閑話: 蘭印時代邦人の足跡』ジャガタラ友の会.
- 山本竹敏 (1995). 『広告の社会史』法政大学出版局.
- 矢野 暢 (2009). 『南進の系譜—日本の南洋史観—』千倉書房 (初版は1975年中央公論社刊).
- 矢野 暢 (1977). 「堤林数衛の精神的『回心』: 『南方関与』の近代的類型」『東南アジア研究』15 (3): 307-333.
- 矢野 暢 (1978). 「大正期『南進論』の特質 (近代日本の南方関与)」『東南アジア研究』16(1): 5-31.

著作・論文 (日本語以外)

- Astuti, Meta Sekar Puji (2009). *Apakah mereka mata-mata?: Orang-orang Jepang Indonesia 1868-1942*. Yogyakarta: Penerbit Ombak.
- Boomgaard, Peter (2007). Syphilis, Gonorrhoea, Leprosy and Yaws in Indonesian Archipelago, 1500-1950, in *Manusya: Journal of Humanities*, Special Issues No. 14. 2007: 21-41.
- Booth, Anne (1994). Japanese Import Penetration and Dutch Response: Some Aspects of Economic Policy Making in Colonial Indonesia in *International Commercial Rivalry in Southeast Asia in the Interwar Period*. New Haven: Yale Southeast Asia Studies, 133-164.
- Cochran, Sherman (2006). *Chinese medicine men: consumer culture in china and southeast Asia*. Cambridge: Harvard University Press.
- De Jong, P. de Josselin & Jordaan R. (1985) Sickness as a Metaphor in Indonesian Political Myths. in: *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 141 no: 2/3, Leiden, 253-274.
- Dick, Howard (1989). Japan's Economic Expansion in the Netherlands Indies Between the First and Second World Wars, *Journal of Southeast Asian Studies* September, Vol. XX No. 2. Singapore: NUS, 244-272.
- Dijk, Cornelis Dijk, Kees van, (2007). *The Netherlands Indies and the Great War 1914-1918*. Leiden: KITLV Pers.
- Goto, Ken'ichi (1997) 'Returning to Asia': *Japan-Indonesia Relations 1930-1942*. Tokyo: Ryukei Shyosha.
- Mook, H. J. Van (1942). *Tien Jaar Japansch Gewroet in Nederland Indisch*. Batavia: Report of the Netherlands East Indies Government.
- Murayama, Yoshitada (1993). The Pattern of Japanese Economic Penetration of the Prewar Netherlands East Indies in *The Japanese in colonial Southeast Asia*. Ithaca. Cornell University: 89-111.
- Nawiyanto (2010). *Mata Hari Terbit dan Tirai Bambu: persaingan dagang Jepang-Cina di Jawa masa krisis 1930-an dan 1990-an*. Yogyakarta: Penerbit Ombak.
- Post, Peter (1991). *Japanese Bedrijvigheid in Indonesia 1868-1942: Structule Elementen van Japan's Economisch Expansie in Zuidoost Azie*. Unpublished PhD Thesis. Amsterdam: Vrij Universiteit Amsterdam.
- Post, Peter (1993). Japan and the Integration of The Netherlands East Indies Into The World Economy, 1868-1942. *Review of Indonesia and Malaysia Affairs*, Winter no 27: 134-165.
- Post, Peter (1996). The Characteristics of Japanese Entrepreneurship in the Pre-War Indonesia Economy in Lindbad (ed.) *Historical foundation of a nation economy in Indonesia 1890s-1990*. Amsterdam North Holland: KNAW, 297-314.
- Post, Peter (1996). The Formation of the Pribumi Business Elite in Indonesia, 1930s- 1940s In: *Bijdragen tot de taal-, land- en volkenkunde*, Japan, Indonesia and the War Myths and realities, 152. Leiden: 609-632.
- Shimizu, Hiroshi (1991). Evolution of Japanese Commercial Community in the Netherlands Indies the Pre-War Period (From Karayuki-san to Sogo Shosha) in *Japan Forum*, 3: 1, 37-56.
- Shimizu, Hajime (1980). Southeast Asia in modern Japanese Thought: the development and transformation of "Nan-shin-ron". Brisbane: Department of Pacific and Southeast Asian History School of Pacific Studies ANU.
- Shiraishi, Takashi and Shiraishi, Saya (1993). *The Japanese in Colonial Southeast Asia*. Ithaca: Cornell University.
- Sugiyama, Shinya & Guerrero, C. Milagros (ed) (1994). *International Commercial Rivalry in Southeast Asia in the Interwar Period*. New Haven: Yale Southeast Asia Studies.
- Sugiyama, Shinya (1994). The Expansion of Japan's Cotton Textile Exports into Southeast Asia in *International*

Commercial Rivalry in Southeast Asia in the Interwar Period. New Haven: Yale Southeast Asia Studies, 40-73.
 The Tohondinippo Sha (1939). *The Directory of Japanese Netherlands-Indies Commerce*. Batavia.
 Warren, Francis J. (1993). *Ah Ku and Karayuki-san: Prostitution in Singapore 1870-1940*. Singapore: Oxford University Press.

未刊の研究論文

村上咲（執筆年記載なし）「ベスト対策を通じたオランダ領東インド専門保健行政の定着1900-1925」: 1-22.

文書館史料

Inventaris Arsip De Javasche Bank (旧ジャワ中央銀行公文書, (1985) Stukken Inzake de Economische Penetratie van Japan in Nederland-Indie (オランダ領東インドにおける日本の経済進出の証拠) 1922-1951. Inventory number: 2959-2964.

National Archive of the Netherlands, The Hague, Ministerie van Koloniën: Geheim Archief (Ministry of Colonial Secret Archives), 1901-1940, access number 2.10.36.51, inventory number 133, 161, 166, 187.

National Archive of the Netherlands, The Hague, Algemene Secretarie van de Nederlands-Indische Regering en de daarbij gedeponeerde Archieven (Registered Archives of Secretary General of Netherlands Indies Government), 1942-1950, access number 2.10.14, inventory number 5312.

外務省外交史料館 本邦移民関係雑件南洋ノ部J 1.2.0.J2-9.

新聞・雑誌

『東印度日報』

『爪哇日報』

ウェブサイト

仁丹歴史博物館

〈<http://www.jintan.co.jp/museum/index.html>〉(最終アクセス2011年6月7日)

毒滅

〈<http://kusuriya.sakuraweb.com/dokumetu.htm>〉(最終アクセス2011年6月5日)

Gonorrhoea Symptoms in Men in GONORRHEA

〈<http://www.std.gov.org/stds/gonorrhoea.htm>〉(最終アクセス2011年6月3日)

注

- 1) 一般的な名称である「太平洋戦争」が、太平洋地域における「日米戦争」を強く想起させるため、本稿では、1941年12月8日に始まった日本軍による東南アジアにおける戦争を指して、「大東亜戦争」と呼ぶ。これは〔倉沢1992: 11-12〕の指摘に倣ったものである。
- 2) 主に若い女性を買い受け、娼館・遊郭などで男性に性的サービスを提供する仕事を強要する人身売買の仲介者を指す。「からゆきさん」たちの海外渡航には、斡旋業者として、彼ら女衞が介在していた。
- 3) 本書は、1942年にニューヨークとイギリスで刊行されたものであり、1930年代から1940年代初頭にかけて日本が喧伝していた「大東亜共栄圏」樹立構想とオランダ植民地政府に対して計画されていたとされる政府転覆活動(subversive activities)が「記録」されている。すなわち、これはオランダ政府がスパイ活動とみなした日本人の様々な行動についての報告書である。
- 4) 旧ジャワ中央銀行公文書「オランダ領東インドへの日本の経済進出」添付4号(1933)。
- 5) 売薬行商人たちの活動によって、オランダ領東インドでの仁丹の需要が拡大した1916年、製造元である森下自体が、スマランに支店(ジャワ仁丹公司)を開設するに至った。
- 6) 各地で個別に話されてきた地方語とは別に、現インドネシアを構成する地域では、歴史的に交易や外交のための共通語としてムラユ語(bahasa Melayu)が使われてきた。これが独立後、国語としてのインドネシア語に発展する。マレー語と訳されることもあるが、マレーシアで現在も使用されている言語と区別するため、本稿で

は、ムラユ語と表記する。

- 7) インドネシアで最初の民族主義団体。バタビアの東インド医師養成学校 (STOVIA) の学生を中心に結成された。
- 9) 日本訳で、「イスラーム同盟」とも呼ばれる。ジャワのバティック商人たちを束ねたイスラーム商人協会 (Sarekat Dagang Islam) をその前身とし、華人との競争からプリブミ商人の利益を守るために設立されたイスラーム政治団体。同団体はその後拡大し、最終的には影響力のある大衆組織運動を行なう団体に発展した。
- 10) これより後の時代になると日本人商人のムラユ語は上達し、流暢であったとする記述もある。たとえば小川利太郎が1930年代にソロ (Solo) で発行したBendeという雑誌のなかで、元従業員のイタミ・ヒラキという人物が、記事を執筆しているが、そこでは、そのような趣旨が述べられている。しかしながら、それをさかのぼる約20年近く前の1913年頃には、状況は全く異なっていた。その当時の日本人達が話していた言葉遣いは荒く、非常に奇妙であった。新聞百科全書 (インドネシア占領時代の新聞史の部分から引用: <http://pwi.or.id/index.php/Pressedia/S-dari-Eniklopedia-Pers-Indonesia-EPI.html>) (最終アクセス2011年8月25日)。
- 11) 1908年2月5日の澳門 (マカオ) 沖での中国による日本船辰丸の拿捕事件がきっかけとなり、日本製品ボイコット運動が発生した。